

薩摩半島に上陸した人々と日向灘を北上した神武

別府を起点にぐるっと回り、古代に思いを馳せました。2023九州旅より



ポイント

- ・瓊瓊杵尊のお墓は三つ
- ・薩摩半島に上陸した人々
- ・神武北上は大和尊と重なる
- ・海の道は対立をもたらした神話を創った
- ・ダンワラ遺跡と日高大神宮（おまけ）

瓊瓊杵尊のお墓は三つ (北川、西都原、新田神社)

- 1.北川瓊瓊杵尊陵墓参考地は7世紀末の円墳、背後の可愛山そのものが御陵で、木花開耶姫の逸話もあるとの事です。
(地元の先生のお話し)
- 2.西都原は女狭穂塚に仁徳天皇の妃の髪長姫、男狭穂塚（帆立型古墳）は父の諸県君牛諸井（もろかたのきみうしもろい）。北郷泰道氏（ほんごうひろみち）の研究成果です。
- 3.新田神社は725年創建、川内川沿いの亀山の中陵には、盤石数枚、石槨の上に一丈四方の石蓋とある。寛藩名勝考（けいはんめいしょうこう）白尾國柱（しらおくにはしら）著中陵は板石積石棺墓のようです。

明治7年に、明治政府は3の薩摩説を元に、瓊瓊杵尊の御陵を新田神社としました。その後、北川も参考地として復活です。

薩摩半島に上陸した人々

- 1.薩摩半島には支石墓群があります。宮の山遺跡ドメルンは瓊瓊杵宮、高屋神社の磐座（支石墓）は山幸彦のお墓されます。
- 2.笠沙岬のそばの秋目浦は、後年鑑真が上陸したところであり、薩摩半島には江南から人々が辿り着いていました。
- 3.串間市の「道の駅くしま」に、BC2Cの南越の玉壁、燕の名刀銭の展示がありました。
- 4.薩摩半島を北上すると、瓊瓊杵関連の遺跡が複数あります。板石積石棺墓群につながっています。狗奴国、熊襲とのつながりはどうなのでしょう？



神武が生まれ育った地

- 1.薩摩・明治政府説では、霧島山麓の皇子原（現皇宮神社）で生まれ、15才まで約1km下った狭野神社で育ちました。
- 2.宮崎説では佐野原聖地です。標高95mの台地上
- 3.15才になって、現在の宮崎神宮に近い小高い丘にある皇宮屋（こぐや）に移り、政務を執り行いました。（薩摩、宮崎説とも同じ）

日向は戦いの地

- 1.熊襲と戦ったのは、（瓊瓊杵）、山幸彦、景行、大和尊です。
- 2.景行は行宮で熊襲と6年間戦い戦死者を行宮付近（高屋神社）に葬りました。そして、この地を太陽に向かう日向と名付けました。
- 3.海幸彦と戦った山幸彦のお墓も高屋神社。
- 4.海幸彦祀る神社は全国で潮嶽神社だけです。山幸彦と扱いにずいぶん差があります。

神武北上は大和尊に重なる

- 1.神武は皇宮屋を出発して、美々津浜から船に乗り東征を開始しました。
- 2.日向灘を北上する途上にある、神の井、速吸門は海を利用する人々には、給水の地、速い海流を乗り切る難所として知られていたのでしょう。
- 3.その後、岡湊を経由して吉備高島の宮で3年間滞在し、奈良盆地に攻め入ります。
- 4.約100年後、大和尊は熊襲に勝利して、同じ海路で吉備を経由して、大和（倭）に帰りました。



(にもものおの)



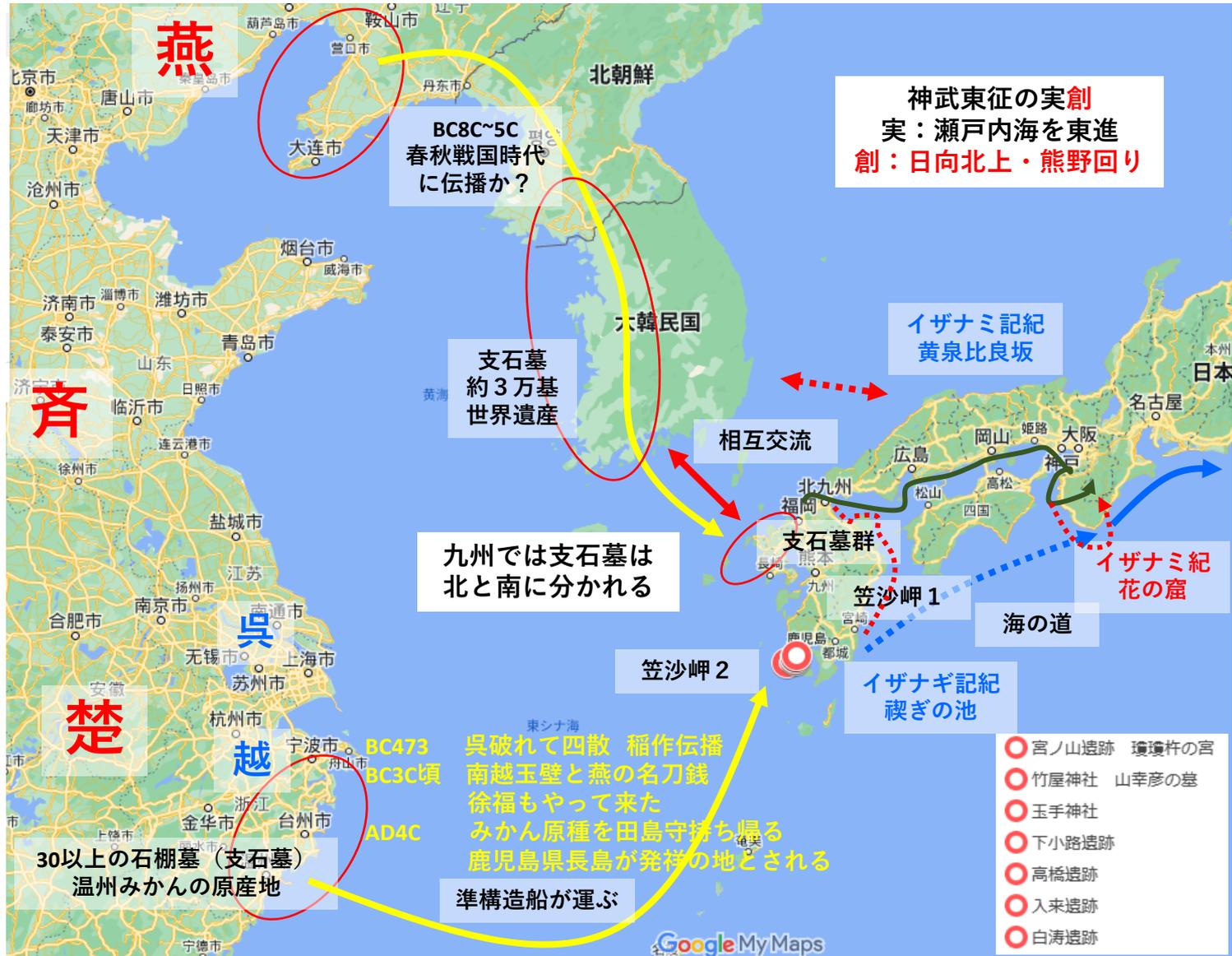
準構造船 国立九州博物館に展示
民族学伝承ひろいあげ辞典HPより

神武東征の実創

- 1.日向は天孫族の神話と元となる実話があります。イザナギが禊ぎして天照が誕生、瓊瓊杵と木花開耶姫の愛の物語、山幸彦と海幸彦との戦い、豊玉姫の難解な出産描写、景行・大和尊の熊襲征伐、仁徳皇妃は日向出身、半島からやって来た都井岬の馬（“馬なら日向”と推古が馬子に言った）
- 2.神武は日向では戦わずに、厳しい海流などを乗り切り、東に向かい紀伊半島ぐるっと回ってイザナミが眠る熊野に上陸しました。そして太陽を背に戦い勝利しています。何を元にした話なのでしょう？
- 3.自然の最高位である太陽を司る天孫族がアマ（海と天）を制すると強調したかったのでしょうか？

海の道は対立をもたらし神話を創った

1. 薩摩半島に支石墓群がありました。瓊瓊杵の宮、山幸彦のお墓と称されている処もあります。長崎などにも支石墓がありますが、こちらは半島からのルートで入ってきたと推察します。
2. 大陸内での対立構造も九州に持ち込まれ、それぞれが北部と南部を後押ししたのでしょうか？
3. 「道の駅くしま」にBC2世紀の南越の玉壁、燕の名刀銭が展示されています。薩摩半島南部にやって来た人々は、北だけではなくと東（日向方面）にも進出していた証です。
4. そして、日向から瀬戸内、熊野から鹿島灘まで続く“海の道”は神話の重要な背景になったと思います。



ナギの巨木は海の道に沿っている 千葉県の木は同族の「イヌマキ」



楠は準構造船の部材



資料



笠沙岬2
薩摩半島



笠狭岬1 延岡



イザナギ禊ぎの池 宮崎

神代山陵考
薩摩府 白尾齋藏國柱輯

可愛山陵 (瓊瓊杵のお墓)
薩摩国高城郡水引郷
↓承認

高屋神社 (山幸彦のお墓)
鹿児島県肝属郡肝付町北方
↓不承認 霧島溝辺町が比定

吾平山陵 (ウガヤのお墓)
鹿児島県鹿屋市吾平町上名
↓承認

白尾國柱 神代山陵考

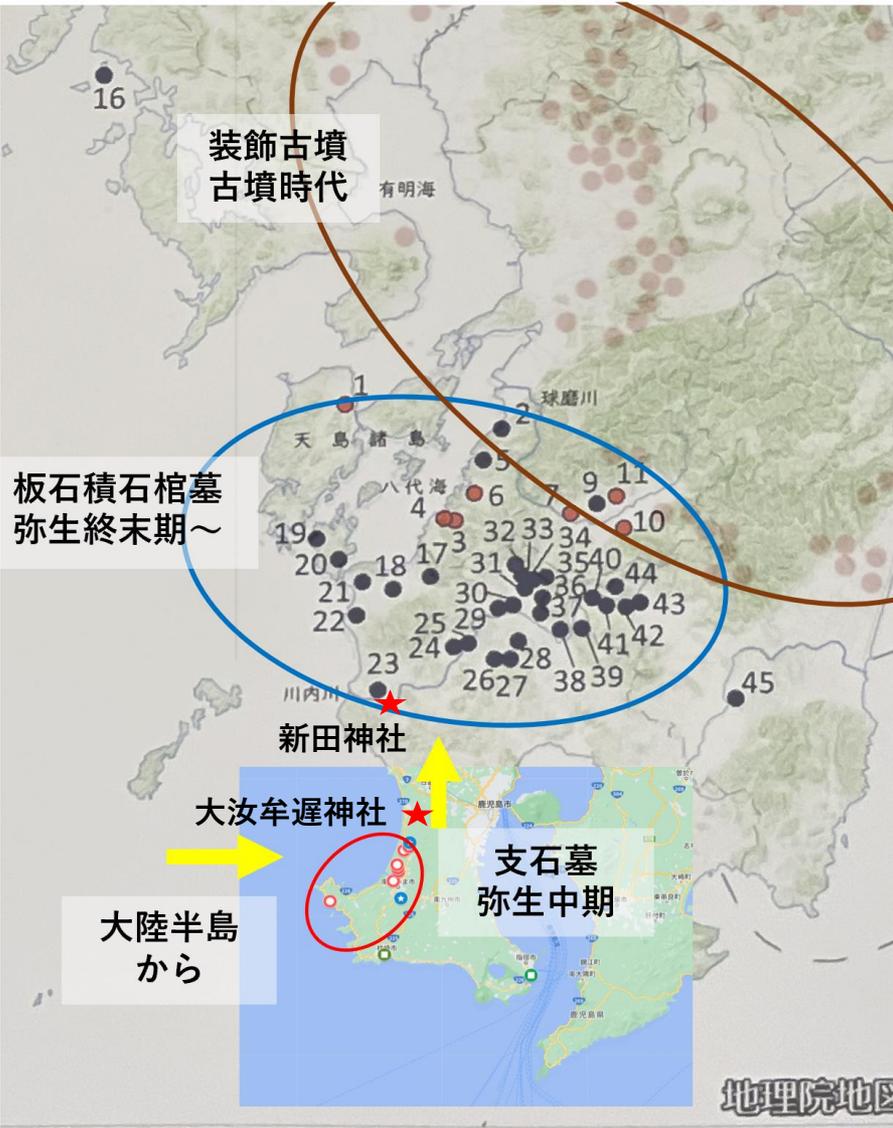
在薩摩國高城郡水引郷五臺村中山之巔日本書紀曰天津彦彦火瓊瓊杵尊崩因葬日向可愛之山陵天書曰瓊瓊杵尊時出誕彦火火出見尊曰宜以讓此也次生子遂崩葬筑紫日向緣之中山之巔陵也即是矣遂葬於日向山陵天書曰國柱謹按今中山陵之右新田廟在焉即記瓊



串間市出土の明刀銭

串間市で、紀元前3世紀後半、中国燕代の貨幣である明刀銭(めいとうせん)が出土した。南海産貝交易の中で薩摩半島を媒介として大隅半島側の串間市へもたらされた可能性が指摘されている。

支石墓 板石積石棺墓 装飾古墳の分布



この玉璧とほぼ同じ大きさ、文様構成のものが、中国南部の南越王墓から出土しており、その年代から、「王之山」の玉璧も紀元前2世紀頃のものと考えられる。

南越王墓最大の玉璧 (直径 33.4 cm)
(左写真はほぼ実寸大)

大汝牟遲神社の参道

千本楠
この辺り一帯は、古来大汝八幡の神域で二十数株の大楠があたかも竜が寝ているように連なり、また、天空高く梢を伸ばしている。この中の、倒れ伏して朽れた楠が親木と伝えられ、当時は根回り18メートル余りあったという。明治43年日英博覧会に出品した楠材の切株は樹齢800年以上と推定された。神話によると大汝牟遲命下向の時、楠の木の杖を地にさされたところ、これが根付いて親木となり増えたと伝えられる。

日置市教育委員会

ダンワラ遺跡と日高（ひたか）大神宮に行ってきた

1. Googleマップの目的地は線路沿いの地を指すだけ。背後の丘陵部には民家有るので入ってはいけない。
2. 北側丘陵の「日高大神宮」には、ぐるっと回って徒歩で登っていく。現在は地元神社の雰囲気。
3. 南に接する玖珠川は筑後川の上流、平塚川添遺跡から3.3km離れ、邪馬台国の東端に位置する。

注) 「裏山の横穴古墳群、手前の土を線路の盛土のために移動した後に横穴が発見された。さらにその下の平面から竪穴石室と思われる二つの遺構8m隔てて細長く露出していた。その中の西側から鏡と、鉄刀、轡などが遺存していた。東側からは碧玉製管玉、水晶製切子玉、ガラス、製小玉などが出土している。(雑誌国華 853号、1963年4月 梅原末治)」



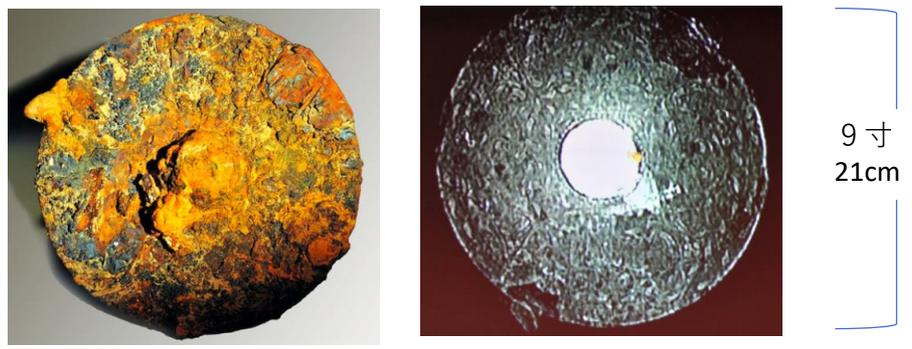
金銀錯嵌珠龍文鉄鏡（きんぎんさくがんしゅりゅうもんてっきょう）比較

実物

CG再現

実物

CT画像金の象嵌で文様



ダンワラ遺跡（日田市）

曹操高陵（中国河南省）



4～5世紀の中国製の「き鳳鏡(きほうきょう)」と鑑定。三重大八賀教授 飛驒高山 こくふ観光協会HPより

・これら三枚（更に中国に一枚有るが）は、同じ大きさ、同じ文様で夔鳳鏡のようだ。
 ・夔鳳鏡は銅製もあるが、大体2-3世紀に作られている。(Japanサーチ他)
 ・銅が不足していた魏の時代に鉄鏡が作られ、卑弥呼に送られた100枚の一部という説に従います。

飛驒一之宮神社所蔵（岐阜県高山市）

（日田と日高、日田と飛驒、會所と恵蘇）

- ・日田に久津媛（ひさつひめ）という女神がいたとされている。（豊後国風土記）
- ・久は日田となり、和名抄では「日高」と書かれているとのことで、日高大神宮の名前と一致する。
- ・日田と飛驒はほぼ同じ発音、同じ鉄鏡出土。九州から鉄鏡を持って岐阜に移動したのは誰か？
- ・日田は邪馬台国の東端（陽が昇るところ）と飛驒は邇芸速日に関連する尾張の北端となる。
- ・久津媛が祀られている會所神社は“えそ”神社、齊明天皇の殯宮は恵蘇八幡宮。つながりありそう。